



千載和歌集

乾





やまこみくし前いらるや梅の神代よりくしま
てあしう紫のなまあふあふひりたふことし
多ひいらねおりくし延喜のひり紫の神代
よ小令集とくし天曆のあし白川の神代よ
くし海撰集のあつたあひ白川の神代よ
後拾遺と物せし先堀川よ先帝とくし比の
所とあしつらりめおるりたあしうこと
わさ世の風俗くし多これこのくし
あしく名と世しあしこれあひあひ
さしうさるおとてとうふくくたくりひ
くしかりきれしあしなれんんんんんんんんん
さあしあし今をばあしうんんんんんんんこの

前とくしあしうはくし神代よりくし
山の神とくし傳教大師を後を山松の
くし紫とくしあしう世の法とくしくし
りあしをたたらとくしあし又集とくし
なまあしあしあしあしあしあしあし
後世のあしあしあしあしあしあし
のあしあしあしあしあしあしあしあし
しあしあしあしあしあしあしあしあし
みさうりくしあしあしあしあしあしあし
うなるとくしあしあしあしあしあしあし
をさしあしあしあしあしあしあしあし
あしあしあしあしあしあしあしあしあし

けじなりとせむ河原のまはらうはくしに秋は
 一ゆめあまをたたらひひらきおろく春の菫
 の花よりとやうりちうりおれはふりつり
 ととくきつこふあなひまたこもあれは
 のうみあひのくまぐぬ情たぬまの
 花のあつて娘の月の花もなほしとの人
 河原うらさすといふことありある時
 けしけのなほくみはさうへありまはるゆ
 ととあつてつりこもあつてゆめあま
 ゆめらとさうりにならうてまのこつてつり
 よりとあつてつりこもあつてつりこも
 あつてつりこもあつてつりこもあつてつり

ことよきこととせむ河原のまはらうはくしに秋は
 あつてつりこもあつてつりこもあつてつり
拾遺集よりとせむ河原のまはらうはくしに秋は
 けしけのなほくみはさうへありまはるゆ
 ととあつてつりこもあつてつりこもあつてつり
 あつてつりこもあつてつりこもあつてつり
 成よきこととせむ河原のまはらうはくしに秋は
 ことよきこととせむ河原のまはらうはくしに秋は
千載和言集よりとせむ河原のまはらうはくしに秋は
 く初撰よりとせむ河原のまはらうはくしに秋は
 花のあつてつりこもあつてつりこもあつてつり

うねほあうくわのしきそりーかさるわんし
久しくはみらばゆめい梅くさふとみれふ
ふもくくはあましきあ中ねのそあうぬ
ろうれ葉の枝らあれあふれとらう
あくさむじめりうれく宮治山ろ信春撰とらひ
らああそとくさうみくこのことうあなとらうり
てやまし一節あ式とららりららとれとれらり
集とらう梅らあむいーあめくさうりい戸この
やせり人あがう梅らあ梅らあ梅らあもたさ
ひくいあうらあふらうとさふ
らうのりああ梅らあ梅らあ梅らあ梅らあ
むららうさむあまらうもあれとあくあくこの集

梅くわらうーや草かあめ月をたくとらうのさ
んしとらうとさうああとらうああしこの集
かこのあひあうーとらあれとらあ梅らあ梅らあ梅らあ
ひくくはあさうりあ梅らあ梅らあ梅らあ梅らあ
ああああ春秋とらうりせとらあ梅らあ梅らあ梅らあ梅らあ
うああや文治あ梅らあ梅らあ梅らあ梅らあ梅らあ
とさうああういあてらうりあらうーとらあ梅らあ
あ

千載和歌集卷第一

春歌上

くらもりのきの日よるはゆめ

源俊賴朝臣

まのくさりのをのぶとるはせはあもろふまきくめを
堀川院は河百首并もろもろ何れある

中納言因信

みじ河山岩もまのまのくさりの下あもろくくま
百首并もろもろ何れある

侍所門院松川

常田ふもあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
堀川院は河百首并もろもろ何れある

よめる

前中納言也房

道あるのこいひし物と山と川と流るはれはるの言ふ
兼勝武彦内裏後書は可合し萬とよめる

藤原朝経朝臣

春もてい言ふトあうらさきて岩の言ひはさくある
後冷泉院の山付中庭あは可合しとよめる

大納言澄国

山と水と地とよまやあうらさくあは可合し言ふはく
法住寺入道あはるさむらひし中書内大臣
ゆるり付十首は可合しとよめる

源俊頼朝臣

春もつらとて言ふは可合しとよめる

右大臣はゆるり付家可合しゆるり言ふ
可合しとよめる

攝政前右大臣

あはるはゆるり言ふとよめる
堀川院の山付百首は可合しとよめる

前中納言也房

わらふとよめはゆるり言ふとよめる
あはるはゆるり言ふとよめる

刑部卿頼朝

春もれはゆるり言ふとよめる
た無兼清澄房

見渡せばとよめはゆるり言ふとよめる
百首の可合しとよめる

待賢門院堀川

これぞちの松もやまをありぬらむつとていふふひれ
家も信も女房ののこまふ月七日前中にお
女房もふかと作しありけり紙きこあつ
りりり

法部卿追後

うー山一雷乃下学ばふて誰とふひのそをり
堀川流の山付百首お祈りもさるうらもさる
おそくさる

徳やうりぬ歌

去日御方おとまりつとてさふふと神のおれぬ
い月乃在日汝言の飛く信る御も安の梅と
わけてうーあこの朝はつりりり

権中納言俊忠

候そむお梅もえそふあもあつとてねとていふおの
せー

源信頼朝后

梅もあふんとお梅もあつとてあつとてあつとて
梅乃木も言の飛くもあつとてあつとてあつとて

左京大夫頼朝

ひりかして海ついで言の言のあつとてあつとてあつとて
永保二年二月庚辰とてあつとてあつとてあつとて
あつとてあつとて

久沢宗右衛門尉頼朝

かろる者もあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて
堀川流の山付百首の祈りもさるうらもさる
あつとてあつとて

大納言御頼朝

いふとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて

前中納言道房

よむひらりとてまらぬ梅の花をば
崇徳院一首首の弁をりきりける

大炊御門右大臣信成

梅の花かりてはぐさきりつれに
歌一首

梅の花をばはなれりよのこのや
歌一首

藤原道信朝臣

ゆふみそ風や吹らむ花の香のよ
歌一首

皇太子太子俊成

春の夜にわらぬ梅とる月の光と
百首の弁をりきりける梅の花をば

梅の花をば

崇徳院御製

去る夜に吹らむ風の梅の香をば

梅の花をば

源後頼朝臣

梅の香はとらぬ梅の花をば

歌一首

右大臣信成

ひらき香をばはなれりよのこのや

二品法親王

梅の花をばはなれりよのこのや

権大納言実家

風流をばはなれりよのこのや
中流をばはなれりよのこのや

さよふもろお海一様ふおひつふ来て白土屋
ち又後成のりくはけり一様なる

大納言三房

昔よりおまぬ高れむの気とふふいさくをたつん
堀川流の山付百首おまよりきりさくさくさく
心とさめる

前中納言三房

くも山よおぬ春の海ぬれかそらさくさくおたぬむ

藤原基俊

去雨ぬ海初一より行雲のをり野の系とあさ織る
歌一す

いはり式部

はれくさるは波のぬめるとまのよあやふらるるむ
堀川流の山付百首の弁おらり早蕨とよめる

友原とやし

深山おらぬ野お下ろあさくさくさくさくさくさく
四景流の百首の弁おらりさくさくさくさくさく
さくさく

藤原法御親臣

かこりいん意のあ茶やめつむむはははとあさくさく
堀川流の山付百首の弁おらり油鷹さくさくさく
さくさく

源信賴親臣

春とれあのおおらりさくさくさくさくさくさく
油鷹おらぬ紙よとけさくさく

左大臣将良臣

おらりさくさくさくさくさくさくさくさくさく
後三位賴政

天降るひし川を流るる海の浪をてし向うりし

祝部宿禰成仲

河の馬いし雲井もあし春も心ありとなくさやふ
景法院百首の弁もきりきり何まの弁とく

景法院百首

春は花を白くもあつたれは方じいじの曙は花

百首の弁もきりきり何まの弁とく

景法院百首

あさけの花も門の心ひの愛おしに咲く

待賢門院堀河

い流るる花咲ぬらむとふふらと山をなむらぬ

白川院花もらん

うらたれをみくさるる侍らる

東御前おないまう比若

山採の花も雪もさうとれぬむの心あくつらう那

鳥羽院花もらん

花もらん

花園大夫

かみささの流るる花も雪もさうとれぬむの心あくつらう那

徳大寺左大臣

あせの流るる花も雪もさうとれぬむの心あくつらう那

景法院百首

花もらん

景法院百首

初花のわたりにかりにけりわふさうと云は山に也
法住寺入道前を政大臣

かろこといそぬ程なむらうらうと云は花のたもとほし
寛治八年いふおわがいにわさう代春のこら湯
流れ家の新令は橋のそとて

中納言女

山標のふあうはまお風といさうにあり流るるむ
お原の櫻田

花は人よわらぬ山さかりる心いそおあけし福と
お原の家と十程倍表しけり白川流
山さきせけりく入の目新しき流ふさうと
よみけりる
お原前たわいさう代春

橋ふおわくおまよあひぬれけりおとや流るるむ
後二条岡白内大臣
花より長い山さきと云はせいそさうと云は
衣清門僧基忠

咲より花のわたりいまおけりたくさぬおとさうと云は
お原見花をいつる心いそえけりる

中院右大臣いさう代春

鳥祥さうと云は橋のあこおとさかお波のぬさぬ日いけり
東山と云は花見けりる日換けりる

右大臣

ありはあしと云はおわあしはおあはれさうと云は
十首の新人のこらせけりるさうと云はお新しとて

前代参り侍公亮

今人の心よきむも揚ふかいくまがらうま海からむ
景徳院は百首の弁をりきり耐ふか弁一うて
よめ

た京ち又取油
前を儀教長

か流くまやたう油の山の標もやあつたはよてあひん
山標家こをあつたりとつふまあう風をうま
津のよむと室乃山にまうととたのうゆふらてとる
夜思山花といたるんんん

仁和寺入道法親王覚性

あをすうと花の白いと思ひやまらうやや子一瑞の用ん

為深山花といたるんんんんんんんん

これおやとあうぬ山海と思ひ入るとい花のふりあがり
身花日常といたるんんんんんんんん

源信頼朝臣

言うてぬうんいおれや油揚あつたあまて下ふうあ
花の弁を渡ふ 道因法師

花拾へよあうぬ山海いあけまも油うふまおんありたり
賀茂社乃弁合そて入くとん信う耐む花弁

友京公時朝臣

とと油くむの標のまおあとうめ子物いおかりきり
孫忍公衛朝臣

花ゆくりの雪は白きあけぬれをいそがしきるわふ
春日の社の弁合をいそぐもんはゆきかたはなむ

歌仙法師

吉野川みづさびとゆきしとま根とこそや花は白浪
おの花をいそぐ心とよんゆき

よん人あつた

うほやあまの山と昔のうほ山さくうか
日長は雨の弁合をいそぐもんはゆきかたはなむ

祝歌高祿成仲

ゆき浪やあまの山と昔のうほ山さくうか
花の弁合をいそぐもんはゆきかたはなむ

うほやあまの山と昔のうほ山さくうか
花の弁合をいそぐもんはゆきかたはなむ

圓住法師

うほやあまの山と昔のうほ山さくうか
花の弁合をいそぐもんはゆきかたはなむ

吉野川みづさびとゆきしとま根とこそや花は白浪
おの花をいそぐ心とよんゆき

徳伴正

春とてゆきとあまの山と昔のうほ山さくうか
百首弁合をいそぐもんはゆきかたはなむ

待賢門院のうほ

白雪と雪の揃いえ花は白浪さくうか
上野門院兵衛

花のあまの山と昔のうほ山さくうか
花の弁合をいそぐもんはゆきかたはなむ

新合一 俗名時花の可しとあり。

大宰大貳重家

とら川をわたるさうりさるる世にあらはるふさの白雲

藤原範徳

さしちやわがくは山乃花つらふる世にや入むるさうりさ

十首の介へ

さるる世にあらはるふさの白雲

よるる世に

伊右衛門太夫後成

山乃花のさうりさるる世に

さるる世にあらはるふさの白雲

天保六乙未秋閏七月朔日於豊嶺山以彼藏本寫之 中村直道

千載和歌集卷第二

春介下

鳥羽殿のねがひさるる世にあらはるふさの白雲

とらの川をわたるさうりさるる世にあらはるふさの白雲

流るる世に

白川院沖製

咲けり春まをさるる世にあらはるふさの白雲

みらるる世にあらはるふさの白雲

さるる世にあらはるふさの白雲

院沖製

池あり汗を拭きおのきを浪のたうりさるる世に

山乃花のさうりさるる世に

大文弟太政大臣

白雪と暮ふいふて栞むらねありはあはれなる
百首の祈りきむむの祈り

叔母幸道朝臣

昔野山ふいふに暮ふきりなむく沙も暮れしを
寛治八年ゆふたねわむおほいさうら若の言
湯院の家乃祈命栞紙なる

内侍同防

山栞むむふむいくなつらるふおのむむむむむむむむむ
後朱雀院の山栞うのどのこまむむむむむむむむむ
花見ゆきりふむううりにたれは白川ぬまむむ
くまのむむむむむむむむむむむむむむむむむ

大納言長家

まゆふぬたみまはむむむむむむむむむむむむむむむむむ
栞紙油山栞むむむむむむむむむむむむむむむむむ

赤深赤門

ゆめむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
堀川院の山栞む百首の祈りむむむむむむむむむむむむ
らむむ

前中納言色房

山栞あふふのらむむむむむむむむむむむむむむむむむ
花のらむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ

藤原仲実朝臣

右京基俊

春と花く花かきむむむむむむむむむむむむむむむむむ
崇徳院の山栞十六首の祈りむむむむむむむむむむむむ

そく法行り

右兵衛督と行

風吹ふ吹山色の内らう花られをわさ浪さう

百首の寄すむき時よめる

兼赤城親陸

去風さう吹山をえ花られし浪さう海乃浪ハまらる

花の寄そそむをゆるる

左中将良陸

揚きひう吹山を吹まら花をり狂くあな海浪

花の寄とらうとよるゆるる

右近大将実房

ちりり花の寄きいれ海ひしとあはれなる

花の寄とよる

権大納言実因

あつちくし花つあいらむら花はあは感いふ

久松田代花家と月にく花のひひらる

ん紙よめか

権中納言通親

揚花うき花なるなうあういさそ花とあはまは

花の寄とよる

俊惠法師

吹く山下風や拂らひ梢のわ花のあはら

源有房

へ板のわくゆらひ山さう風あまやいらじらう

道因法師

ちりれと月なるふらう思ふあはそそ花をゆるる

覚盛法師

あつちくし花なる花の傍や風さうまぬ揚をらう

源仲經

山橋をよみてを思ひし秋のぬへにふわりきり

花の香とるくもふり

道永法師

よそそを思ひしきり橋を先のまへも菊一つ

池よ橋の香波をくもふり

徳因法師

橋らのあけぬいそ花をひらきかへりきり

花浮洞あそりきりふれよきり

花園た大屋

山風よ花つむ花をいれいれくもふり

山家花とるくもふり

前大納言俊実

花のふれちりてふ花を山よき拂ふ花をいりきり

花あ音拂りきりふり

友原基俊

花よ花よりいそ思ひし花をいれいれくもふり

ふらり園をいりきり時を花の園を花をいり

源義家朝臣

吹風よ花よ花をいれいれくもふり

その目し山をいれいれくもふり

僧が花をいれいれくもふり

源仲正

あそ花をいれいれくもふり

百首の奇きものなる所をのりてある

前巻後巻

鏡山ひかりの光をたもとれらりつとてさうひのりま

前巻後巻

ふあき秋の光をたもとれらりつとてさうひのりま

堀川院の山府の百首のうらりつとてさうひのりま

前中納言色房

思ふとちえあやうきものなる所をのりてある

おのり百首のうらりつとてさうひのりま

中納言色房

こころの神をたもとれらりつとてさうひのりま

後理大臣

きこひの神をたもとれらりつとてさうひのりま

永承二年后の文をたもとれらりつとてさうひのりま

後理大臣

道を通り入野の光をたもとれらりつとてさうひのりま

堀川院の山府の百首のうらりつとてさうひのりま

前中納言色房

春のうらりつとてさうひのりま

前巻後巻

やうき秋の光をたもとれらりつとてさうひのりま

堀川院の山府の百首のうらりつとてさうひのりま

おのり百首のうらりつとてさうひのりま

二条右大臣

九字に居入歌を紙うすしに升子の種おんとそと
あはれ歌をいしつらん紙よめる

五糸花伝

右師川原のあはれ歌を紙うすしに升子の種おんとそと
藤原定親

いかにあはれ歌を紙うすしに升子の種おんとそと
歌を紙よめる 惟宗店云

いかにあはれ歌を紙うすしに升子の種おんとそと
百首の歌を紙うすしに升子の種おんとそと

五糸花伝

歌を紙うすしに升子の種おんとそと
右師川原のあはれ歌を紙うすしに升子の種おんとそと

よめる

康資と母

いかにあはれ歌を紙うすしに升子の種おんとそと
永承五年丙寅秋新令友をいしつらん紙よめる

中納言祐家

九字に居入歌を紙うすしに升子の種おんとそと
百首の歌を紙うすしに升子の種おんとそと

大納言右大臣

いかにあはれ歌を紙うすしに升子の種おんとそと
やまひの紙うすしに升子の種おんとそと
いかにあはれ歌を紙うすしに升子の種おんとそと
いかにあはれ歌を紙うすしに升子の種おんとそと

二糸流抄製

我を又まゝにゆるし給へ

百首の祈り

あきつ

宗徳院御製

我の祈りよりの御祈り

心をゆるし給へ

中務卿具平の御

命りよりの御祈り

式子月親の御

祈りよりの御祈り

百首の祈り

大納言澄春の御

言をゆるし給へ

二月の祈り

久我内大臣

入道の祈り

藤原定成

いづれも祈り

源仲綱

為りよりの御祈り

藤原経家御

いづれも祈り

二月の祈り

琳瑯法師

と祈りよりの御祈り

二月廿九日白雲寺居又後成のとき一讀して
つらうきり
法下釋讀

花のみかほり風もあそびれをひらりや雲もふりえ
同二月廿九日白雲寺

於大僧於乾玄

花乃まかほり風もあそびれをひらりや雲もふりえ

海路二月廿九日白雲寺

於大僧於乾玄

花乃まかほり風もあそびれをひらりや雲もふりえ

城川院の山もふり首のけぞりきりふりえ

言とよめる
米中綱吉已房

花乃まかほり風もあそびれをひらりや雲もふりえ

前安大河内

花乃まかほり風もあそびれをひらりや雲もふりえ

物とよめる

乙未年閏七月二日於豊嶺山書寫之 中村直道

千載和歌集卷第三

夏弁

堀川院の御時百首の弁をのこさるる時之衣の
ら海浜よもゆき。

前中納言色房

衣衣苑のなりよぬふくくさのこもるる海よりたり

友松基俊

あこのあ輝ぬ衣をよみよははよまにそありきり

崇徳院百首の弁をのこさるるよまのうらみ

弁をよめる。 藤原実清朝臣

あそりまの朝よりし人のや卯月よひもあはむ

卯月とよめる。 左京大夫朝臣

むらうくささるる海の卯むらぶらるる月あらしをま

言見卯月といふら海よもゆき。

右大臣大将実房

松有よのりく影を卯むのさける海にまけりたり

卯むは所よもゆき。

仁和寺後入道法親王

む川くまなきく卯むとあはれさるる海よもゆき

白川院百首の卯むとあはれさるる海よもゆき

弁をよめる。卯むとよめる。

友松基俊朝臣

あそりまの朝よりし人のや卯月よひもあはむ

卯月とよめる。 左京大夫朝臣

よる

道教法師

あつさきいん人うり部あふまう人ともりく被う

新次

康資主母

孫定を成たりたけけ八時多つふ人ともりく被う

刑部卿頼朝母

時鳥ふりや時鳥ふりといふくうもく時鳥ふり

覚感法師

向ふていふ人ともりや時鳥ふりといふ初言やうけり

崇徳院の首首の所をりてをりてあり

前各誠教長

為てとすいふ物成教ふたのめなるをりてあり

まじりてあり

持大御言實家

社といふ人といふや時鳥ふりといふのやうあり

言天時鳥といふやうあり

仁和寺法親王守覺

やういふ人といふや時鳥ふりといふのやうあり

所らけりてあり

かきうといふやうあり

頃三任頼政

いふやうあり

右大臣の所をりてあり

時鳥の所をりてあり

持政前右大臣

あつさきいん人うり部あふまう人ともりく被う

時中時中といふ心証を伝ふる

右大臣

やうに次修つたかといふ証にありては此の月とあり

時中の所をある 権大納言実國

あつたといふ事か時中をいふかといふ事か

権大納言宗家

由月に入るといふ証にありては此の月とあり

前代時中

時中といふ証にありては此の月とあり

権大納言時中

皇太子実成

さういふ証にありては此の月とあり

右大臣実房中ねし時中時十五前時中

伝ふる 道因法師

此の時中時中といふ証にありては此の月とあり

時中時中 権中納言長方

いふ証にありては此の月とあり

久保内大臣の家にて時中時中といふ証に

あり 前中納言雅頼

知人いふ証にありては此の月とあり

高浦の所を伝ふる

権大納言宗家

いふ証にありては此の月とあり

同大臣良通

初とくも物とまきなく川を流るわわやうとくつらむ
後赤穂院の西村長久二年九月一日内親王の命
命に花摘とある 皇太后文に五言

きくそくね花摘の匂ひふらそくあつ神いふれたかんと
歌一す 友原のよし

風らる初あらそく神いふれたかんと
友原家基

海空のいとくつらむとくあつとく
たふ年親宗

秋高に花摘と吹風はあつ里らりうきれあつとく
花摘萱花とくつらむとく
藤原公衡親臣

たのしとわれ花とらそくあつとくあつとく
百首の命りそくあつとくあつとく

あつとくあつとくあつとくあつとく
宗徳院沖親

花月と花とらそくあつとくあつとく
新らす 宗親と梅仁

花月と花とらそくあつとくあつとく
堀川院の西村百首の命りそくあつとく

花月と花とらそくあつとくあつとく
友原基俊

花月と花とらそくあつとくあつとく
源俊頼親臣

花月と花とらそくあつとくあつとく
中流入道たふ年中ねとつらむとく

六月雨の弁とてある

藤原仲朝臣

六月雨あまきよきぬまらつてつらきいふれり
崇徳院百首の弁とてある

大京より歌物

六月雨日敷いぬとてつらき
新巻紙親澄

皇太后より歌物

六月雨の初よりつらき
友原法物親臣

六月雨の初よりつらき
河下より歌物

待賢門流女流

六月雨あまきよきぬまらつてつらき
持政より歌物

源行親朝臣

六月雨の初よりつらき
藤原五月雨の初よりつらき

源仲正

六月雨あまきよきぬまらつてつらき
月形郭よりつらき

賀茂成保

六月雨あまきよきぬまらつてつらき
中郭よりつらき

梅窓使資質

お花うりわらぶよきけけ何言の月にくか六月旬はそ
同如部をいりるん瓜をある

中納言時

あふ改の山附方家のふりり開らり作や家よりらん
後一条の沙八海くま抱樹虎よりりくゆる
かろく墨そそやとくまの信信をれいある

律師宗選

ち瓜窓はひりりらんれを信あふ山のやとくまは
瞻初上人雲在寺の唐くく未飽部といりる
んとよき信る 徳信頼朝臣

かこくそく思ひ初きむ時言言の作山の法信智ら

堀川院の山附きとこのあそく同五月敦といり
るん瓜法信る 於中納言信忠

有月屋の村山の附方花つとくまをく智とを
おそく山時百首の弁をらとまり時照村のん
とく信る 於中納言包房

あしき信あ城う系下病とを信ふとらとるがとくま
ぬ理ち又信忠

さ月やとくまやに信忠信とと火の雲信とま信り
於中納言後忠中わと信るり附方合し信安の附
照村の弁そよある 藤原信俊

有月屋の山と山とあつ唐のりしとあそく入
とくま信忠とある 大和守信宗

~~~~~  
~~~~~

法入~~~~

~~~~~  
~~~~~

賀茂主保

~~~~~  
~~~~~

百首~~~~

坂原孝通撰

~~~~~  
~~~~~

郎~~~~

源俊頼撰

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

法住寺入道前をぬた

~~~~~  
~~~~~

百首の~~~~

崇徳院沖製

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

和泉式部

~~~~~  
~~~~~

松下~~~~

中智~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

仁和寺~~~~

去後之好の好いおふ物とゆふをを好かたりたりたる
百首の弁よりきり河海空け前を流ゆる

大欽法門在在

あふり入深かりきり海空山まをるおぼなるのこひ

郎 法下意園

山流や空の流ありきりて衣の印よりひらきしは夢

坂原道徳

好ふされむわの好むて縁も周知と川の流を深しよ

坂原法師

思ふとりの流れと流るるをたてりより衣とこしつ

取昭法師

ゆらゆらふ光流しき衣の流と流れよわしつ

泉色納涼とらふん流流る

法昭実使

とれたむ山あふみとれくすきり物と好むきし

夏夜納涼とらふん流流る

坂原道徳

祇けりやとをよおぼや惜しむれおのるる明は月

夏月とらふん 祝部有孫成伴

衣の衣は月の光なりけりいづれわらわすのそらむ

白河月明とらふん流流る

坂原法師

ゆふまのまに結やとを雲よりたけり空をそら月を

大友のまをぬる家そら衣月如秋とらふん流

よめる

菖原敦仲

小萩をこゝれゆくぬき城の底やこゝの月よけりん
弟も先萩よりこゝろとらぬ

歌仙法師

衣衣を野好雲とを控ふにけりぬくこゝ萩うれきり
松風萩をこゝろに萩よめる

菖原親盛

秋風の浪こゝろやこゝろんきこゝろ清くふ萩松山
刑部が萩備前命一侍りこゝろ納涼の心とこゝろ
侍り

前奉成教長

若くしく岩の水のこゝろ清くまゝとらぬ山色は
藤原威方朝臣

若下よりあがる萩の白糸の流るるを清くけりきり
百首の可きりきりけりけりけりけり

菖原素通朝臣

を梅られわたりぬき萩をこゝろ清くまゝとらぬ
皇太后原あま佐成

いれそとわたりぬき萩をこゝろ清くまゝとらぬ
今月後とらぬ 清人あま佐

萩後より川流るる萩や清くまゝとらぬ萩風をこゝろ

国七月四日

中村直衛

千載和歌集巻第四

秋分上

飯音よと伝る

侍従のめはこ

秋分つこきほめくは秋高の病の風吹かるといふ

二平法親王

あこらふは病きこもつらう飯よよにあらうとさき物と

百首の一首もさき物秋立の歌あり

待賢門流のやりう

秋分をきくふら森の下風をまをゆゆおとれありきり

皇太后太后文徳成

八重葎さうこさう山をきゆいそ秋分をさうらう

初秋の心とある

寂然法師

秋分ぬ手ハ甘ハさぬや秋分風の秋と海とさうらう

法人ありて

木の葉はよあやうとく物と秋風に秋分海と秋

秋分と秋とくさうとある

賀茂主政

秋山の雲吹風とさうらうあつらうとさうらう

柳若門流の秋分今も病とある

大藏卿の宗

物と秋分前とさうらうとさうらうとさうらう

初秋の心と

源信賴朝臣

秋風や海とさうらうとさうらうとさうらう

七夕の心と秋分とある

持政前を大后

七のゆゑの中をいふあはれむいづれかきよのゆゑよふらえ
百首の寄りたるしるしに付七のゆゑをいふ

大納言澄季

七のゆゑ大はひとて候様風よつたの梅あつと山松あはし

堀川院の山府百首の寄りたるしるしに付
二条本室本后大妃は

七のゆゑあはれむいづれかきよのゆゑをいふ

前母大后内

悉くいふにいと斗や七のゆゑに
七のゆゑあはれむいづれかきよのゆゑをいふ

七のゆゑあはれむいづれかきよのゆゑをいふ
源信賴朝臣

七のゆゑあはれむいづれかきよのゆゑをいふ

百首の寄りたるしるしに付七のゆゑをいふ

崇徳院沖製

きよのゆゑあはれむいづれかきよのゆゑをいふ

七のゆゑあはれむいづれかきよのゆゑをいふ

出陣門を大后

大の川のゆゑあはれむいづれかきよのゆゑをいふ

堀川院の山府百首の寄りたるしるしに付

淡修の
大納言仲頼

林のゆゑあはれむいづれかきよのゆゑをいふ

新
親王家甲斐

七のゆゑあはれむいづれかきよのゆゑをいふ

雲指寺燈籠上人房より寄りたるしるしに付

菟原道次

由らるれば朝の露やさめらんあはれよのぞみはかたや
草むす秋のうらふらふあり

法中静賢

秋きぬと風はほそと一山とて松をたぬす花をさうか

部一ら文

淡々

いふれと上紫と風の秋風よあはれおはし世のあはれ

和泉式部

今とあはれとせとさうせと秋の花咲ゆふらけおほらしはる

菟原伊家

秋山は梅のこころのうらみ音はそぞろに秋の籬ありたり

藤原とく

ふ城跡は秋やとてははるあはれ花咲ゆふらけおほらし

長寛法師

心とふ草はあはれとてははるあはれ花咲ゆふらけおほらし

堀川院乃所付百首の所付とてははるあはれ花咲ゆふらけ

大納言仲光

病氣は梅のほろけはれ花一枝ありははるあはれ花咲ゆふら

法性寺入道前を以てははるあはれ花咲ゆふらけおほらし

いふとてあり 前中納言雅直

とてあはれとてあはれとてははるあはれ花咲ゆふらけおほらし

新中納言時公光

とてあはれとてあはれとてははるあはれ花咲ゆふらけおほらし

那らす

おゑの家

吹風おれおれとささく一難をたのたおりき

橋政前右大臣家へ命一侍より附せられた

りるをとせり

藤原威方親臣

秋ふれやう歳うの時うす出のきとさへかつさけ

堀川院の山附百首うきりきり時よあり

源信賴親臣

油くよんをささるお誠堂のこおれさく出るさく

燈籠を若うりるん伝うある

秋ふれお高うとありと踏ひを踏くうたの物よりたれ

百首うきりり時報前とよあり

右大臣通親臣

野分を海のへお前ささるとん後さんおふへあしとさ思ふ

白鳥居美又後成

秋ふれお燈籠の秋風うりそ新をわりの物よりた

那らす

源信賴親臣

何くさく物をかひきさうあやうこのさおれおれゆふれ

百首の命ささせ侍附弟たのん伝うさけりき

橋政前右大臣

油くおれお高うとありと踏ひを踏くうたの物よりた

那ら病とらるんと後信らる

二品親王

秋の野分お高うとありと踏ひを踏くうたの物よりた

那ら病

法下意園

草木まきと秋の氣と云ふのへもや野も山も病にあらむ
宗徳院の百首の奇なりきり時ある

待賢門院松川

くろくまの秋の氣と云ふのへもや野も山も病にあらむ

藤原常陸朝臣

龍田の秋の氣と云ふのへもや野も山も病にあらむ

藤原常陸朝臣

秋の氣と云ふのへもや野も山も病にあらむ

圓任法師

大言の秋の氣と云ふのへもや野も山も病にあらむ

通命法師

あつ

秋の氣と云ふのへもや野も山も病にあらむ

いづこも秋の氣と云ふのへもや野も山も病にあらむ

前大納言云

秋の氣と云ふのへもや野も山も病にあらむ

秋の氣と云ふのへもや野も山も病にあらむ

小舟

秋の氣と云ふのへもや野も山も病にあらむ

思燈花といふるの秋の氣

秋の氣と云ふのへもや野も山も病にあらむ

秋の氣と云ふのへもや野も山も病にあらむ

秋の氣と云ふのへもや野も山も病にあらむ

於ふまれのあはらふむおてふらふら風のまの

前大僧正見志

とふらふらま紫はふと紙くれ色より紙はひららり
月の舟あまふ渡ゆる時あり

於大納言実家

秋の夜のとほりすうららとてあつたての月夜ふ
月乃舟舟首をせゆる時あり

法住寺入道前を政長

秋乃月なほのあまのあまにそ晴り言の言のまらり
堀川院乃山内百首の舟をりきり時あり

源信賴朝臣

本指の雲吹拂ふら縁よりさそくと月夜とのあらふ

陸源法師

いほあも月なうとつあれはあもらふしきお山
於政前右大臣あま百首舟をせゆる時月舟
舟をて渡り

於原陸信朝臣

おぬり月をさうけふと山はゆ言はれ
月の舟をさうけふ時あり

於中納言雅頼

く向とあれたる秋の月をるるるのあまそく
皇太后文太後信成十首の舟をりきり中
月の舟

右大臣

月みさしらのあま思ゆしお山とふら中ふとあり
於中納言信志うつらの家とらと月とらり

心風淡ゆるる

源俊頼朝臣

あすこらむ登海はむ川秋こして色ちる浪は月やうりたり
百首の所は中へ月の所こしてとせりふる

景法院抄製

むらする海舟の風を定晴てえとらす秋はく月の

大炊沙門右大臣

こぞあつくお土のち根こまじ月ハ細くうりやうりさうん

白土居文吉史俊成

そくし海は白む敷くそ法能川はまゆる月影

友原清物朝臣

あふ海は浦吹風音くはくし千鶴くまをまゆる月け

法住寺入道前を改去后内大臣よゆるる付月毎

秋友ららるんこととせゆるる時ある

源俊頼朝臣

思ひし海ありてと年は海わらふ物しはを秋はく月の

友原とととと

山はく人ゆきみは淡くけたりことなるは月はくゆるり

藤原道隆

橋の東や天の川をいあらしむ月はえりさえゆるる月

法住寺入道前を改去后内大臣よゆるる付月毎

きり時ある

遠きうらまのさきも月清くあつるありあつる浪

百首の所はくゆるる付月毎を淡ゆるる時

らゆる

右中門持相実

たふりも男もそふもきり
海も月もいふも心成りあり

俊忠法師

渚もふ心成りそふもきり
賀茂社に海も月も心成りあり

権中納言長方

やとりゆ渚もきり
石月也くもきりし川のきり

藤原公時親信

湖上月もいふも心成りあり

藤原朝家親信

月影は渚もきり

月影もいふも心成りあり

頼国法師

照月影もいふも心成りあり
月影もいふも心成りあり

友忠親威

あきらもいふも心成りあり
郎もいふも心成りあり

藤原清隆親信

あきらもいふも心成りあり
刑部もいふも心成りあり

刑部卿親信

あきらもいふも心成りあり
あきらもいふも心成りあり

笠式部

あきらもいふも心成りあり

前大彼言成道

たひきくはしとをたふれだの月とあしとあつたのり
法住寺入道もたふたの家のく洞を月やうつらと
よゆりき
徳俊頼朝
昔月お珠の床やうりうりふらふら山お濱河の水

田七月五日於豊嶺山字文

中村直衛

千載和歌集卷第五

秋歌下

歌一らん 大戴三位

遠くもとあうまをといわぬ秋は秋はるのふりり
河川流の山阿百首の奇なりきり阿らる

友系仲実朝臣

山さといらひひかりきりあ秋は秋ゆふ言のひらしはれ
崇徳院百首の奇なりきり阿秋は奇こく

藤原季通朝臣

秋は秋はと拂ぬ風あもかあきこはるたはくもや
法住寺入道兼のたふたあひまはた兼内大臣
阿らる阿の家お新命は風いこくうらとあ

藤原時昌

疾風のこころに吹く風の音もさびしくもあつた風はもよおし
兼曆二年内裏の命命とある

友東山家御作

松ふたれとの秋風吹風よさびしくもあつた藤原時昌
堀川院乃内府百首詩命命とある

二条大皇太后御作

えむ海山あつた風はさびしくもあつた藤原時昌
大納言とある

そよ風の道やさびしくもあつた藤原時昌
まのつらさ

物仁のふみ

飯の炊かぬ一尾ふみ兼の活けまをくくつらさ

田上乃山とて藤原時昌とある

濃後頼朝御作

さや風の傳者八段ふみ兼の洞の物とある
百首の命命とある

待賢門院御作

ゆき風のふみ兼とある
刑部卿御作

藤原澄信御作

ゆき風のふみ兼とある
後惠法師

後惠法師

秋とあるとある

道因法師

みわく川をねらふ如く世風も麻は賢人せし海をり

唐書の方と云ふと 長覚法師

之誠師は小麻を魚と称し麻は唐の音と云ふて

麻の字を云ふる 大京史脩範

さうしうはたはる小麻をいふれやうかまをさうしうと

大京史脩範

分ふふかしく神はわくか麻の智のあやうき

法下慈因

山さる麻方の麻は音ハ麻は氣のりりりりりり

信惠法師

と麻はくはあけいひ言は麻の音といふ書のつまからん

道因法師

たふふくねととや麻はあきと麻はあきと

賀茂海平

はのりとは麻はゆわくと麻はのりとは麻はゆわ

惟宗底言

まひと麻はあきと麻はあきと麻はあきと

長覚法師

いふと麻はあきと麻はあきと麻はあきと

麻蓮法師

なとまり門向はる麻はあきと麻はあきと

新らす 次人あきと

お麻はあきと麻はあきと麻はあきと

酒造司

祇園のねをひひてし驚きとひ酒作り田し船をまき

并蓮法師

虫の音はわらうとて小波をねはまきおきなをうり

蘇忽為宗朝臣

秋の秋の衣は誰とある物とねのこもきりくはうか

虫多ねてしふんをよき侍きり

たし中將良隆

ふゆくねあふねの思は世の言と氣はききとてうつ

百首ねすりてきり村次侍きり

大炊御門の在入臣

ねとねのねをうりし生ね言のねは言ねりねとあるふ

ふゆくねあふねの思は世の言と氣はききとてうつ

花山院御製

ねあふねの思は世の言と氣はききとてうつ

保延の思は世の言と氣はききとてうつ

弁をて治侍 皇太子文太史佐成

さうさうねあふねの思は世の言と氣はききとてうつ

那いらす 道恒法師

虫の音とねあふねの思は世の言と氣はききとてうつ

式子内親王

弟と本もねあふねの思は世の言と氣はききとてうつ

保冷泉院の山村九月十二夜月言侍きり

侍きり ちみね衣のねあふねの思は世の言と氣はききとてうつ

法性入道前を以て内入信ふ家前今
残菊とある

友原基俊

宗たるれとありて痛といふをたれは引く菊は
月照菊花といふをたれは引く

内入信

白菊はふとく病をうるといふをたれは引く
離菊は吉といふをたれは引く

宗大僧正の巻

雪のく離のこははははと思ひてふそ白菊は花
菊は安そとある

祐感法師

朝のく離の菊は引くといふをたれは引く
百首は引く次は引く時菊は引くとある

友原家隆

雪のく離の菊は引くといふをたれは引く
宗徳は百首は引くとある

友原孝通

雪のく離の菊は引くといふをたれは引く
瞻の上人雲右寺といふをたれは引く
信とく野風は引くとある

藤原基俊

信とく野風は引くとある
初時白菊は引くとある

入道法親王の巻

初時白菊は引くとある

寛延法師

村雲の何處へ帰るお家さうすくくくくくくくくくく

秋の菊さよふる。 友原実家

何處の何方の何處のさよりと故にゆふにさるるありたり

新ららす 道命法師

たれお家のおもひの思ふくむとくお家のおもひ

さすけりあま政と居お家さるるさるる

小弁

若くしとくもさるるさるるさるるさるるさるるさるる

お家さるるさるるさるるさるるさるる

素意法師

お家さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる

命命一何れも何れお家の命さるる

た京ち実家

山形さるるお家さるるさるるさるるさるるさるる

月思お家さるるさるるさるるさるるさるる

何れもさるるさるる

院沖製

さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる

お家二年は信与友の命と何れも今も何れも何れも

さるるさるるさるる

右のれおさるる代君

山形さるるさるるさるるさるるさるるさるる

大綱と実家

法見方開く處くわの江流のさきふみは紫ありたり

権中納言実守

江紫を周守神くまのまてらふ坂山とるふふ赤根

元大弁親宗

のみらふお宿のうらり〜まの家のこりきり白川の雲

次之位親政

都くはま〜ま紫をそり〜お紫あり〜白川の周

湖とあ紫〜い〜る〜と〜る

刑部卿範直

き保やひ〜お紫根の山なり〜お紫と海は地あり〜つる

百首の弁よりきり付あり

藤原法楊親直

ま南山雲おし〜まありせ〜は〜は〜あ〜海〜

覚感法師

海〜い〜お紫の北は河田と〜お紫〜

と清流の山耐禁を紫あり〜る〜と〜る

右大臣重朝

海は御〜あり〜は〜お紫〜は〜紫〜は〜紫〜

大井川のお紫を〜る〜り〜る

後惠法師

きよるれ〜風の山はお井川と〜みら〜お紫〜

道周法師

大井川お紫〜あるお紫〜お紫〜風の〜

百首お紫の中〜お紫と〜る

友京法橋燕弁

いんさうふふ向のふにわさよわねさうりりかふふふふふ
あはれふふとよめる 祝歌成伸

賀茂成保

吹かすら振る息とえんせしとをふ風とわさよふふり
ね同あはれふふとよめる

友京羽仲

さうらねね風乃もいふさうららハ振乃ふらりあうたり
ねのあはれふふとよめる

惟宗彦言

ねのあはれふふとよめるさうららハ振乃ふらりあうたり

歌一々

法橋燕弁

ちりほさるあはれと風とわさよわねさうりりかふふふ
堀川院乃山付の百首あはれふふとよめる

源信親朝臣

秋のゆふあはれりりさるふふとよめるさうららハ振乃ふらりあうたり
百首のあはれふふとよめる

折政右大臣

あうふあはれと川の色有くふのあはれあはれあはれ
あはれあはれとよめる

ほふ宗内大臣

言くけいねといふわあはれさうららハ振乃ふらりあうたり
百首のあはれふふとよめる

々々

崇徳院所製

秋の気候なりと云ふれ秋の気候なりと云ふれ
山寺秋書なりと云ふれ秋の気候なりと云ふれ

前入僧正覚忠

秋の気候なりと云ふれ秋の気候なりと云ふれ
雲居なる秋の気候なりと云ふれ
九月末の秋の気候なりと云ふれ

瞻雨上人

秋の気候なりと云ふれ秋の気候なりと云ふれ

源信賴朝臣

秋の気候なりと云ふれ秋の気候なりと云ふれ
兼曆二年の秋の気候なりと云ふれ

前中納言包房

秋の気候なりと云ふれ秋の気候なりと云ふれ
百首の秋の気候なりと云ふれ

秋の気候なりと云ふれ

秋の気候なりと云ふれ秋の気候なりと云ふれ
秋の気候なりと云ふれ

乙未閏七月廿日豊嶺山馬子

中村直道

千載和歌集卷第六

冬哥

堀川院北河百首の祈をりこきり初をり
似續御定る 大納言云実

雪のうねり言一うり初をり岩戸北河のうすこりらむ
源信頼親臣

いづこり紙乃をりと評らほあはれは紫く風あつたハ
藤原仲実親臣

いづこり紙乃をり初をり初をりの心成るを初をり
宗徳院沖親

いづこり紙乃をり初をり初をりの心成るを初をり
宗徳院沖親

大納言門右大臣

いづこり紙乃をり初をり初をりの心成るを初をり
大納言陸奥

いづこり紙乃をり初をり初をりの心成るを初をり
前奉御教長

いづこり紙乃をり初をり初をりの心成るを初をり
大納言門右大臣

いづこり紙乃をり初をり初をりの心成るを初をり
大納言門右大臣

いづこり紙乃をり初をり初をりの心成るを初をり
大納言門右大臣

いづこり紙乃をり初をり初をりの心成るを初をり
大納言門右大臣

百首の奇なりとて付初巻の奇は流ゆる

大炊沙門を大信

初巻やまゝしむらん場は終のまゝしむらんやれ

河川院の河付百首は奇なりとて付よりの

赤中納言也房

ち初巻の河付終巻の奇なりとて付初巻の奇は流ゆる

藤原基俊

初巻の奇なりとて付初巻の奇は流ゆる

初巻の奇なりとて付初巻の奇は流ゆる

初巻の奇なりとて付初巻の奇は流ゆる

初巻の奇なりとて付初巻の奇は流ゆる

初巻の奇なりとて付初巻の奇は流ゆる

馬内侍

初巻の奇なりとて付初巻の奇は流ゆる

初巻の奇なりとて付初巻の奇は流ゆる

初巻の奇なりとて付初巻の奇は流ゆる

初巻の奇なりとて付初巻の奇は流ゆる

初巻の奇なりとて付初巻の奇は流ゆる

初巻の奇なりとて付初巻の奇は流ゆる

初巻の奇なりとて付初巻の奇は流ゆる

初巻の奇なりとて付初巻の奇は流ゆる

初巻の奇なりとて付初巻の奇は流ゆる

初巻の奇なりとて付初巻の奇は流ゆる

初巻の奇なりとて付初巻の奇は流ゆる

社子の洞や空かきあひむ時句くもかまの月

藤原隆信撰

うきを祿の音やうはしむあひむらとて同し留まらぬ

時句抄を流す 隆信親政

ふたつうきの下にる取のいじとて跡はあしけむらり

源師光

時句のころのゆふはあつふゆつとあふまきめらるん

道因法師

嵐吹ひらけは木の蔭をうらむれ時句ふれ月を

堀川院の山前百首はあはれとさる時句の時句は

中納言圓信

冷山をけけむくくくくくくくくくくくくくくくくく

源俊親撰

木の葉のころのあひむら時句の洞をぬゆめをさる

二条大納言唐土肥後

ゆりくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

赤任法師人くくくくくくくくくくくくくくくく

あまのこくくくくくくくくくくくくくくくく

友原定家

何ものくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

淡人くくく

むきくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

山家時句くくく

源仲規

花のさかすかにあはれのついでに言はれりやとてわらふ時をたたり

新古今 紀康宗

暁を祢はるる河をさしゆく人の袖をさしき

あまのついでに 藤原威経

おとそをいふ風をいふおまをいふ山をいふ

中納言定頼世のついでにいふついでにいふついでにいふ
ついでに 中納言定頼女

おまをいふついでにいふついでにいふついでにいふ

ついでにいふついでにいふついでにいふ

中納言定頼

ついでにいふついでにいふついでにいふついでにいふ

堀河院の御所百首はすなかりきり時應行紙よ

ついでに 藤原仲実朝臣

ついでにいふついでにいふついでにいふついでにいふ

源信朝臣

ついでにいふついでにいふついでにいふついでにいふ

源信朝臣

ついでにいふついでにいふついでにいふついでにいふ

傳大納言道保家持介合よ千鳥と

藤原長家

ついでにいふついでにいふついでにいふついでにいふ

ついでにいふついでにいふついでにいふ

ついでにいふついでにいふついでにいふついでにいふ

道圓法師

茶之好りの成保よ三子らるる十や海つらむ

太左衛門

悦成やあつらん月乳の法よ何系八千鳥鳴也

法中静賢

頼さんていんあつらわね酒さし物やととやちちん

聖成保

お板の難波のり〜おあ〜こあ〜みお〜ちちん

源親房

おんえんやとものおと拂あ〜む〜おと〜の〜おと〜

聖武郎

お鳥と水た〜やと〜いん〜おと〜は〜の〜おと〜

松川院の四河百首の介とらとら時あ

前中納言也房

水ちりむよの成たうふ花うふ思ひに流るゆさね

百首の弁あ〜きり時よとせねふ

景徳院沖製

こつらね〜の〜おと〜を〜と〜もの〜おと〜おと〜

た系又形油

那波〜入に〜あつら〜り〜おと〜おと〜の〜おと〜

水初法ら〜と〜 松中納言也房

〜ち〜おと〜おと〜の〜おと〜あつら〜ん〜つ〜おと〜

お鳥のあえ流る 道因法師

鴨ねの〜入に〜あ〜おと〜おと〜あつら〜ん〜つ〜おと〜

聖成堂保

とくちあはれしんひのちあはれおのちあはれおのちあはれ
月前あはれしんひのちあはれ

兼左門督公

意うこのそくを月影いあそ浪のねくくくく
わ月影の心と浪り 平実公

あどかきの子あはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

兼左門督公

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

道周法師

月のまじりあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
百首のあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

兼左門督公

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

兼左門督公

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

兼左門督公

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

兼左門督公

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

宗徳院沙製

あつたてく 宗徳院を 宗徳院の 宗徳院の 宗徳院の

宗徳院沙製

あつたてく 宗徳院を 宗徳院の 宗徳院の 宗徳院の

宗徳院沙製

あつたてく 宗徳院を 宗徳院の 宗徳院の 宗徳院の

宗徳院沙製

あつたてく 宗徳院を 宗徳院の 宗徳院の 宗徳院の

宗徳院沙製

あつたてく 宗徳院を 宗徳院の 宗徳院の 宗徳院の

宗徳院沙製

あつたてく 宗徳院を 宗徳院の 宗徳院の 宗徳院の

宗徳院沙製 宗徳院の 宗徳院の 宗徳院の

宗徳院沙製

あつたてく 宗徳院を 宗徳院の 宗徳院の 宗徳院の

宗徳院沙製

あつたてく 宗徳院を 宗徳院の 宗徳院の 宗徳院の

宗徳院沙製

あつたてく 宗徳院を 宗徳院の 宗徳院の 宗徳院の

宗徳院沙製 宗徳院の 宗徳院の 宗徳院の

宗徳院沙製

あつたてく 宗徳院を 宗徳院の 宗徳院の 宗徳院の

宗徳院沙製 宗徳院の 宗徳院の 宗徳院の

宗徳院沙製

浪う来ハ江は音と消かす一のつとていある。此ふ

書つ前を讀みたる。右のたのむる地者

ふとらふらふのいぢも、理をく、まゝにふつと成るなり

右とらね実房

あつとあつとあつととち、理をく、山は海は海といわさ

波止位摺取

あえつとてい、まゝにう、海とつと山とつとあつとあつと

新船法師

浪戸よりえつと、まゝにう、あつとあつとあつとあつと

右のたのむる地者、あつとあつとあつとあつと

藤原良法

ゆゑまゝあつとあつとあつとあつとあつとあつと

歌歌の法術は、あつとあつとあつとあつとあつと

浪人ーらん

海客、あつとあつとあつとあつとあつとあつと

乃海客、あつとあつとあつとあつと

西経法師

この歌、あつとあつとあつとあつとあつとあつと

歌、あつとあつとあつとあつとあつと

善行のあつとあつとあつとあつとあつとあつと

音のあつとあつとあつとあつとあつと

まはるゝとの、あつとあつとあつとあつとあつとあつと

佐恵法師

雷のあつとあつとあつとあつとあつとあつと

閑情満ちてくる心波を伝ふる

内大臣

清き心流絶われをきく山香より閑情たへしありきん
年月は梅名花好むけりてとてきく伝ふる

天台座主明叔

山にけりよ乃梅は雪よりかきりても八雲を白らり
雪中蔵言とてくると伝ふる

前大納言実長

かぶくしめ心とみえを傳ふくして今年けりりゆり
いそりわて伝ふるいそり言ふとある

前大納言信光

うりうりて歎くこといほりて心は言とてよたり

年乃言はれ成なる 相模

糸も言のりけりぬふのりけりては初花はあつた

蔵言幽懐のちりりともある

惟宗居士言

ねりぬふははるぬふの言とて歎くことい

徳光行

ねりぬふははるぬふの言とて歎くことい

蔵言好むと伝ふる

前律師信宗

一年のちりぬふははるぬふの言とて歎くことい
ねりぬふははるぬふの言とて歎くことい
閑中蔵言とてくると上人も伝ふるありきん

何事

民部卿親範

御事とらりひふといと行くと知てや年終

安永六之書

天保六乙未年閏七月七日於豊嶺山守之

中村直道

千載和歌集卷第七

離別

今依乃ほひの錢一きりそ何とて改修なる

藤原実方卿臣

昔よりいそとありふとたむいととらひもかき

有困大氣ふありとらり宗ら付決ゆりある

前大納言公任

別るはゆきりて行ふ命か市よとひあえんと思へ

をよまきありある人のまきとまきを跡ゆり九月

はくさ月ひの書あられなりとれ

紫式部

あこらりの離れまことあかしたれ別やあかすむ

堀川院乃西門百首の弁なり安んよ別の人交

より伝る

大徳と云矣

そのしむねをいふべし海に船をとりあひしむる

若中納言色房

ゆ未汲約つよ方よりむよれ別いたのまよのころハ

濃信相親也

あつれ海に山あり海をこして舟に客の舟はとるとも

彼乃よむと各時いふやいよ海をこしてつとく人の

いふ伝るれ海を 大徳いふる

あつれ海に山あり海をこして舟に客の舟はとるとも

百首の弁なり安んよ別の人交

大京ち又 邪物

あつれ海に山あり海をこして舟に客の舟はとるとも

上西門院兵衛

あつれ海に山あり海をこして舟に客の舟はとるとも

赤穂資通大徳と云のわりきりよ飛石とて海に

つらりきり 大京院断

あつれ海に山あり海をこして舟に客の舟はとるとも

と 大京大氣資通

あつれ海に山あり海をこして舟に客の舟はとるとも

あつれ海に山あり海をこして舟に客の舟はとるとも

道命法師

あつれ海に山あり海をこして舟に客の舟はとるとも

あつれ海に山あり海をこして舟に客の舟はとるとも

よる

中納言國信

海のらまを那の度とすもやハ信方の国やあつちりせハ
の舟言こしとんと決行なる

八条前を収た店

そあしくお徳ひの成し風さして初言あわらるるやお中納
海行しくお徳ひの成し風さして初言あわらるるやお中納

和泉或郡

お徳ひの成し風さして初言あわらるるやお中納
丹後國はあつちりせとんと決行なる

赤松末門

お徳ひの成し風さして初言あわらるるやお中納
お徳ひの成し風さして初言あわらるるやお中納

あつちりせとんと決行なる

和泉或郡

お徳ひの成し風さして初言あわらるるやお中納
お徳ひの成し風さして初言あわらるるやお中納

津守有基

お徳ひの成し風さして初言あわらるるやお中納
お徳ひの成し風さして初言あわらるるやお中納

女之甲斐

お徳ひの成し風さして初言あわらるるやお中納
お徳ひの成し風さして初言あわらるるやお中納

お徳ひ

深雅克

ふれぬうこ雲あり居とまあり秋法やい藤の空なる
百首の年やきり時旅の分そよもせぬ事ある

紫雲流少製

かり衣袖の雨くゆる秋八月と藤子ののらりとそん
ねる縁の世も何あつてあつてはひるふそはひのひるこあ

大炊少門在在

ねほし跡きり家一きこ頼ねられあてとあはれぬと

若急事通朝臣

ゆじあやとと松山と月とと初と誰と秋とあつてひ

待賢門院堀門

通とあつてとそと海船と那松山乃雲うくれ想ふ

同院女御

こね紫とゆよ病あつてわと京いよお藤と並れうね

皇太后文佐成

海つこ子後とゆおつてわと京いよお藤と並れうね

世にそむきをねはれりしゆとあつて海船と月と

因位法師

こつとねとゆと病とそと初とと一と月ととととと

高僧法親王元法

空のわねと世の中とまうねれいれくと藤のしらとそん

あつて所定の國と月かりきり時旅の分そよもせぬ事ある

前中納言師仲

か平流ふいりしとつてねとあつてひるふそはひのひるこあ

とくちまよふ川の海に身をまはす河童のつとめ神おれり

源仲徳

むとめく破んてつとめはる旅の神とあわれむを

大空を居る小舟

草花のつとめの神と又水守の河童とあつたり

歌一首首の年をせむる河童のつとめく法分

らあり

折政前右大臣

とくちまよふ川の沖とつとめはる花のつとめを

取部右大臣

とくちまよふ河をくつとめはる雲とつとめはる

皇太后左大臣俊成

糸守の野つとめはるつとめはるつとめはるつとめはる

旅前つとめと法分る 二不転也

とくちまよふ川のつとめはるつとめはるつとめはる

旅前つとめと法分る 法分意圖

旅のつとめはるつとめはるつとめはるつとめはる

本長末持御房

弟れより旅つとめはるつとめはるつとめはる

岡崎つとめはるつとめはる

法分意圖

とくちまよふ川のつとめはるつとめはるつとめはる

百首の年法分る河童のつとめはる

右大臣俊成

つとめはるつとめはるつとめはるつとめはる

修の戸ありありなるを野中一宿して修あり
此修の修あり修あり修あり修あり修あり

赤土法師

かろく修あり修あり修あり修あり修あり修あり

修の修あり修あり 修律師寛年

修あり修あり修あり修あり修あり修あり

修あり修あり修あり修あり修あり修あり

赤土資忠

修あり修あり修あり修あり修あり修あり

修あり修あり修あり 赤土親宗

修あり修あり修あり修あり修あり修あり

修あり修あり修あり修あり修あり修あり

中康損

かろく修あり修あり修あり修あり修あり修あり
修あり修あり修あり修あり修あり修あり
修あり修あり修あり修あり修あり修あり

修於下性

修あり修あり修あり修あり修あり修あり
修あり修あり修あり修あり修あり修あり
修あり修あり修あり修あり修あり修あり

修あり修あり修あり修あり修あり修あり

乙未閏七月九日於豊後嶺山下

中村直道

千載和歌集卷第九

哀傷并

花のさうりふを思わねどもとて石見の山
ねりあると中將宣方朝臣のうわくとゆらさり
まじはる多しとあつたゆらむとささるる
うねり中將の御心月下ありまらみなり
うねりとて大納言の御心はさうりある

中將御具平のみこ

春をれをさうり花を思ふさうりあはれ別れさうり
と

大納言の御心

ゆらさうりもや思ふさうりあはれ別れさうり人のみとあはれ
さうりもや思ふさうりあはれ別れさうり

藤原範永朝臣

うねりさうり人思ふさうりあはれ別れさうり
浮正平の御心はさうり

和歌式部

花のさうり思ふさうりあはれ別れさうり
花のさうり思ふさうりあはれ別れさうり
藤原の信朝臣

花のさうり思ふさうりあはれ別れさうり
中將の御心はさうり

藤原の信朝臣
花のさうり

あつたてのついでに御願ひを申し候へば
せうとうあまの御心も御座り候へば

龍山院御願

うけいしと書ももえり候へば
一宗院に御願ひ申す候へば

源通海

あつたてのついでに御願ひを申し候へば
あつたてのついでに御願ひを申し候へば

通命法師

とくれしと書ももえり候へば
龍山院に御願ひ申す候へば

龍泉寺

むらさきのあまの御心も御座り候へば

一宗院に御願ひ申す候へば

上東門院

あつたてのついでに御願ひを申し候へば

あつたてのついでに御願ひを申し候へば

あつたてのついでに御願ひを申し候へば

あつたてのついでに御願ひを申し候へば

あつたてのついでに御願ひを申し候へば

あつたてのついでに御願ひを申し候へば

弁乳母

あつたてのついでに御願ひを申し候へば

江崎次

紫式部

よはるる御所よりいふ御所へついでにあらはし居る御所
恒徳云々これ御所なる御所たるに依りて後世の
中へ依りてとていふに依る

藤原道長御所

身とて人々をあらはし居る御所なるに依りて
上東門流るる御所なるに依りて一系流るる御所
なり一系流るる御所なるに依りて

赤深出門

此の御所もみよき御所なり社ももつていふ御所
なり

上東門流

うはるる御所なるに依りて

あつては御所なるに依りて
いふ御所なるに依りて

深実基御所

御所なるに依りて
御所なるに依りて

平雅康

この御所なるに依りて
御所なるに依りて

前中綱の御所

御所なるに依りて
御所なるに依りて

沙也

上野門院書信

らりくし別をきふはるいふ海にともあつらるん
かきひきつらるるいふはるいふうとく成ふらるん
かきあつらるると人のちあつらるるいふはるいふらる

静寂法師

かきあつらるるいふはるいふうとく成ふらるん
かきあつらるると人のちあつらるるいふはるいふらる
かきあつらるると人のちあつらるるいふはるいふらる

文香庵と膳苑

雲原の色はつれもかきあつらるるいふはるいふらる
かきあつらるると人のちあつらるるいふはるいふらる
かきあつらるると人のちあつらるるいふはるいふらる

鳥羽院沖釣

つらりといつらりいふはるいふうとく成ふらるん
かきあつらるると人のちあつらるるいふはるいふらる
かきあつらるると人のちあつらるるいふはるいふらる

久保田のねむいふらる

かきあつらるると人のちあつらるるいふはるいふらる
かきあつらるると人のちあつらるるいふはるいふらる
かきあつらるると人のちあつらるるいふはるいふらる

久保田のねむいふらる

かきあつらるると人のちあつらるるいふはるいふらる
かきあつらるると人のちあつらるるいふはるいふらる
かきあつらるると人のちあつらるるいふはるいふらる

花崗のたぐはる

かきあつらるると人のちあつらるるいふはるいふらる
かきあつらるると人のちあつらるるいふはるいふらる
かきあつらるると人のちあつらるるいふはるいふらる

大炊沙門の衣を居てくれゆるは七月七日母はこ
位好のいせしとこのついでにけりけりけり

持大綱の真象

七のいせしはかきぬ推しお神とこも病をうりたり

と 三位

推しお病をれ袖ハ七のいせしはかきぬ推しお神とこも病をうりたり

持大綱の真象

持大綱の真象

あつとさよとせし時ち推しお神とこも病をうりたり

二帝院くれせあひく四日さお水次給る

法中流窓

たきり一衣の世をときふくもゆぬ膝とゆもかか

大炊沙門の衣を居てくれゆるは七月七日母はこ
位好のいせしとこのついでにけりけりけり

右のいせしはかきぬ推しお神とこも病をうりたり

あつとさよとせし時ち推しお神とこも病をうりたり

母君二位力ゆりては次給る

氏初御成範

与過山おひやあも智くはれ社や若れむ行おむ

母の服はゆるるやと又記行に位力ゆりたり

右忽負窓胡臣

かきりけりて二言いせしはかきぬ推しお神とこも病をうりたり

志ひく物しきりあきりけりけりけり

右京ら又秀法

仁和寺法親王蓮花門院とぞれはるるは月
をけ日への暮而もつかりふらふ山に雲わたりく
ふやとくゆをれは流る

覚蓮法師

山のふもとをふむきやゆをくろりし結ぶ解えそらん
又の中納言取長と暮下の雲深きのさふゆり
くらまかりてよめる 法眼長奥
年と解く昔とあふ心のこもやけととゆの若れとと
母も力分りゆりり時流る

彩和法師

多し比やとよりて旅とけしはしむらうあつ命ありせ
回りのと人お経のほらうゆらありて流る

休庵法師

之流とてし流りて飯の月桂ありむらとあり
お経法師力下ありゆりり正念ありり
〜として急経法師のゆらり流る

寂然法師

絶き心とらりゆらうれはれとて別なきあつ
と〜

圓信法師

この世めて又ありき〜たか〜ふ
〜〜〜人をもみはれ

千載和歌集卷第十

賀正

みこ小擗しゆく宗の御方御成の御成を治りきり
八条院内親王と申宗の御方御成の御成を治り
手成の御成の御成を治り

院御製

夫の世の御成の御成を治り

後三条院

我々の御成の御成の御成を治り

皇太后

我々の御成の御成の御成を治り

祝の御成の御成を治り

我々の御成の御成の御成を治り

堀川院の御成の御成の御成を治り

ついでに御成の御成を治り

源信賴御製

我々の御成の御成の御成を治り

我々の御成の御成の御成を治り

我々の御成の御成の御成を治り

らぬ

堀川院御製

千年の御成の御成の御成を治り

鳥羽院の御成の御成の御成を治り

我々の御成の御成の御成を治り

大納言忠教

つと桂一糸木の梅も候むい事とかきくぬむいりたり
堀川院山河島相殿より行幸の目池上参りしと
淡坊より
桂中綱之候忠

子と候きむ池の汀のいそ病りあふ人屋よりてとらふ
白川院より相殿よりありし申りし所相殿遊幸と
いふことあり
源信頼朝に

祓代よりいひし御遊幸やうに候ふも是程はねの程と有ん
帝孫の御好み政様をいし御孫のま湯屋の家
今合は祝のいふ淡坊より

お比ねき川原をうほ川のあり候き子孫も世に候も
二条大皇太后文が成乃い候ふと申り候中
流りて松板映ありしとらふことあり候る

東御前を政大臣

子とあゆむい候き政のありは川をくまふとけいむい
堀川院の山河島相殿より行幸の目池上参りしと
いふことあり
二条大皇太后文が成

ゆ末とまのいひし御遊幸やうに候ふも是程はねの程と有ん
祝のいふことあり
若原基俊

奥山宮殿のい候き世にまは法とていふことあり
保延二年法金對院より奉りて菊次郎御
いふことあり
法性寺入道前を政大臣

君り代とあり月ありと白菊は候やあせのちりしとらふ
花崗た大臣

いふことあり
公室菊はありしとらふ一若世は子年秋とかななりしハ

八条前太政大臣

此もや梅の邦世はとも入あつてはしゆ一物と白首のこれ
百首の前より一歩の時程の心成りてせしむる。

崇徳院御製

吹風とあはれ枝とあはれとねと六久一き程をさしぬ。
二条院御付之内にわらうまうくくうりてた有
る色とりつらんとせしむるよるはゆある。

たのむやいさう地衣

子世ゆふ初はまこりやよきうきむとそる花折ふ
うぬのとほよよ百首はうまうきり時程の心とく
くせしむる。

二条院御製

白雪のころはあつてはるは世のたもわゆる式

百首の前浪経き時程の程前

式子内親王

うらたをふはれせとあはれとわは山の雪は吹風
栞政をたはふゆり時百首の前よりせしむるよ
程の前より中へ浪経る。

皇太后御製

百首のひりつたこい海とこやの山はたはるく
二条院の御付をたはれ門より念は内裏にゆり
日細のまはれ乃影とて始く浪経海にゆり
鷹翼遊手とくつらんと浪経る。

大炊御門右大臣

羨む世よかきくぬるの夢をわり室のたはるはるく

周流の家をてうりて鞍松争家とつるんは
淡ゆるり
入道兼岡白を政大臣

子身ゆかりの君小松つうへく百代をてねまうみち
源通経親臣

あせとをひいぬ高うへつれね松う君らお宗とねりえ
言余流の山内表よりいりゆるるうへは
万歳樂梅をせねあるとくしそめてあて入り日女扇の
中へ申侍をふ
おねねわいさし比奈

翁お孫のあせまをこみうと山とくあるらうとく
入道右大臣うへて中流の影にねゆるり河流の
らねある
修理あまねま

しほてわらあつねうきふるふあ子年修りて高は地あ

楠佐信親臣の伏見のあうつとわりうへをさひ

せりよある
かみ成和
みねふらうつとくせを高のれ月むとねえく
後醍醐臣をねまの守りゆるりも河流のんは

友忠存長

君の代よりくといくま山おま川のくねをきくありあり
後一条流の山内長初より大嘗会を基方山内
備中国長田山の禁を参ひよあそひよるるを
よめる
善流の政親臣

あせのこれあしとくあつねあり長田お山の麓の松風
白川院の山内兼保より大嘗会を基方編春守神
田と淡か

前中納言忠房

ららや柳の神の好むのいねをれ月日ごとくふくまふ
院の所付の久壽二子大嘗會に悠紀方風俗の
をい國より松の森とよめる

宮内少輔範

そららさね末さうゆへいさういふふたぐそさるおほね
平治三年大嘗會に悠紀方風俗をい國比さ
ゆうとよめる 松の森とよめる

あつらねぬかひさう一ねおとあさね海の内さあつと
同西村大嘗會とよ基方福春が丹波國おほ村と
よめる 刑部少輔範

あつらねぬかひさう一ねおとあさね海の内さあつと

ち倉院中將仁安三年大嘗會悠紀方の所

屏風とよめる 宮内少輔範

お頼りねり人をまをせねをうのよ海山の岡をきた村
今上の所付え曆三年大嘗會悠紀方風俗の
所とよめる

藤原季成

とよねをのみさね山乃ねいさや首新次

あつらねぬかひさう一ねおとあさね海の内さあつと

天保六乙未年閏七月十日於豐嶺山寫之

中村直道

